



耕作放棄地対策のための豚放牧技術を確立

－豚の力で雑草を除去し、耕起します－

開発の背景・ニーズ

耕作放棄地対策のひとつとして、畜産の関係では和牛放牧が取り組まれています。しかし、本県の和牛の飼育地域が中山間地に限定されることが普及の課題となっています。そこで、雑草の除去だけでなく鼻で掘り起こすルーティングによる耕起も期待できる豚放牧技術の確立に取り組みました。

成果の内容

- ①電気牧柵を利用することにより、豚の放牧が可能です。
- ②特別な放牧馴致は不要です。
- ③ルーティングによる耕起面積は放牧方式により差があり、小牧区に区切り、^{ボックス}順次面積を増やす方法が有効的です。
- ④飼料給与量を減らすことで、耕起面積が増加します。
- ⑤ルーティングに加え採食・踏み倒しによる除草効果もあります。



放牧試験の設備概要
豚：アイリス三元豚(LWD)2頭
飼槽と水飲み：コンクリート製
避難舎として子牛用のカーフハッチを使用

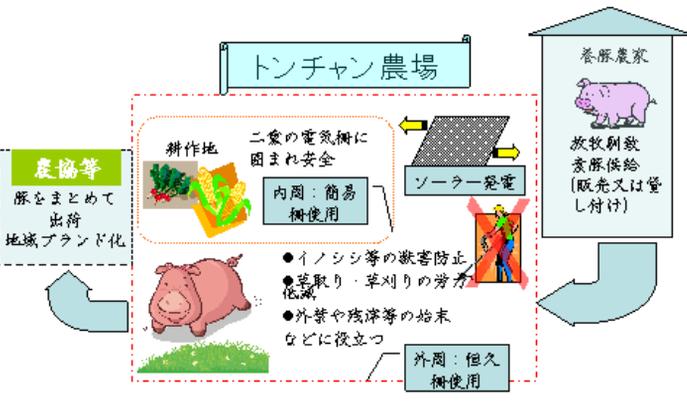


豚による掘り起こし行動（ルーティング）前方にある電気牧柵を認識して行動している。



すっかり耕起された放牧地。
この試験での耕起面積は
3.9 m²/日・頭であった。

豚放牧が目指す トンチャン農業の概要



愛知県農業への貢献

イノシシ等の対策に用いている電気牧柵をそのまま利用することができます。さらに、耕作しているところの周りを簡易な電気柵で囲い、二重柵の間に豚を放牧することにより、豚による除草・耕起が可能となります。また、作物の残渣処理も豚がするため、これを目的にしたイノシシ等の侵入も防ぐ効果が期待できます。